



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

# アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.101

2012.2.1

\*考古学研究所(株)アルカは石器と土器の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

● 神村 透

田舎考古学人回想誌

23

## 「原田島村さんと郷土誌『伊那』」

市田村出身の飯田中学生は郷友会を組織し会員の交流を図っていた。年に何回か会員手書きの原稿を綴って『郷友』という冊子にして回読した。私にとって皆に読んでもらう最初の文章でした。

私が意識して調べ、考え書くようになったのは高2になってからでした。今の様に発表の場は無い。手作りのガリ刷誌『諏訪考古学』6(1951)に北原遺跡の文が載ったのが最初でした。夏休みに調査した「下伊那郡下の本棟」が地方新聞『南信時事』に載ったのが活字の最初でした。この年諏訪に負けまいと私たちがガリ刷誌を作ったが、汚い字・読めない印刷で恥ずかしい物でした。

下伊那郡誌編纂室には市村成人先生を慕って先生たちが集まってきた。その中に元教員で無い人が一人いた。それが原田さんでした。私の両親と同じ教会のクリスチャンでしたので顔見知りでした。原田さんは戦前、郷土誌『伊那』の主幹だったので、集まる人たちに『伊那』復刊が話題になった。早速下伊那郷土史学会を作り、27年(1952)8月復刊1号が刊行された。会費年600円(現在6000円)月刊発行でした。当初350部、原田夫妻が郡下全市町村を歩いて雑誌配布と会員勧誘をし、50年代には5000部の発行となり、郷土誌としては全国一の発行部数となった。最近が高齢化と死亡・若い会員が入会しないため会員数は減少し1800部の発行、が去年秋通巻1000号になった。



原田島村さん



長論文が載った300号

**当時** 私は大学一年、原田さんは『学生だから会費は要らない、代わりに原稿を書いて下さい』と言われて復刊1号から無料配布され、そのまま今日にきている。実に60年、主幹は島村さんから長男そして次男と今は三代目となり、ずっと甘えたままである。

**最初の投稿は27年夏** 愛知県北設楽郡の夏目一平さんに誘われ、久永春男先生の指導で調査した大根平遺跡体験記「三州大根平遺跡より」(27年11月)で、翌年3月「鳥居先生告別式に参列して」4月「或る土偶」5月「下伊那に於ける弥生文化私考」と続いた。弥生文化私考は高3の学生研究助成金の研究を基にしたもので、大学に入り杉原先生・岡本さん・神沢さんの助言を受けて纏めたもので、7回に亘って掲載された。私の最初の長論文でした。

**その後** 送られてくる雑誌の中に「近く何か書いて下さい」「その後の研究を発表して下さい」と書いたメモが何回も入っていた。応えるように短文・長文の原稿を送った。考古学だけでなく任地で調べた民俗的なものを寄せた。最近では古代から現代までの、その分野の先生が読めば何だと思ふような雑多の内容の文を送っている。毎日サンデーの私は調べ・考え・関連文献を読むことが最大の生き甲斐となっていて、何かを書き取り組んでいないと居られない日々である。そんな私の文を無条件に載せてくれる『伊那』には心から感謝している。

**考古学の長文は**「考古学の下伊那」4回 「新野地方の考古学的調査」3回 「下伊における櫛描文をめぐって」6回 「下伊那型石柱(?)石壇」4回があり、地方誌の一文をどこで知ったのか県外の研究者からコピーを求められると喜んで送っている。研究者の書いた論文の註に引用されていると嬉しくなっている。

**最近** 地域の新しい資料の内容で書くと、下伊那の読者が手紙や電話をくれる。これも嬉しいものである。

書けば載せてくれる三代に亘る主幹の好意にただ感謝するのみ。私の研究はこの雑誌『伊那』があって育てられたと言える。これからも書いていきたい。

※巻頭連載は隔月です。次回は「縄文の使用痕」です。

## 目次

■田舎考古学人回想誌	原田島村さんと郷土誌『伊那』	神村 透 …1	■リレーエッセイ	マイ・フェイスレット・サイト(第94回)	近藤 玲 …3
■考古学の履歴書	公務員としての考古学研究者(第2回)	石井則孝 …2	■考古学者の書棚	『世界歴史1 先史の世界』	藤田富士夫 …4

## 考古学の履歴書

## 公務員としての考古学研究者(第2回)

石井 則孝

## 《奈文研・華の39組》

## はじめに

今年平成24年(2012)は、奈良国立文化財研究所が発足してちょうど60周年という記念すべき年に当り、また、奈文研のO・Bが中心となって発足させた日本遺跡学会も早10周年を迎えます。両者共、記念すべき行事を行うべく着々と準備を進めているところであります。

文部省は昭和27年(1952)文化財保護委員会の付属機関として奈良文化財研究所(庶務室・美術工芸室・歴史研究室・建造物研究室)を奈良市春日野町50に設置した。昭和35年(1960)には国立の名称を付し、東京国立博物館・京都国立博物館・奈良国立博物館・東京国立文化研究所と共に国立の研究機関として活動を始めた。同年10月、平城宮跡内に発掘調査事務所が設けられ発掘が開始された。さらに昭和38年(1963)平城宮跡調査部を誕生させた。

昭和37年(1962)国宝建造物姫路城の修復が完成し、担当した技術職員を次の職場へどう振り分けるかで、文化財保護委員会の当事者は、相当頭を痛めたようであった。結果的には全国にある国宝建造物の修理箇所へ振り分けたが、国として定員枠に数十名の余裕が生じることが判明した。この結果、昭和39年の平城宮跡発掘調査部への大量採用が実現したのであった。

## 1. 当時の時代背景

昭和30年代の後半から40年代の前半は、日本列島改造論が叫ばれ、新幹線の開通、高速道路の建設、ニュータウンの建設等、日本列島全体が高景気に見舞われていた。

昭和39年(1964)9月国鉄新幹線運行開始、10月には、第18回オリンピックが東京で開催された。昭和43年(1968)に小笠原諸島の日本復帰、昭和45年(1970)日本万国博覧会が大阪で開催、昭和46年(1971)には沖縄の日本への復帰、同年田中角栄による中国との国交正常化が実現した。

以上の事柄を見てもわかるように、日本列島全体が開発ブームで沸きかえていた。このことで、一気に埋蔵文化財は破壊への危機にもさらされていった。従って、国に限らず、都道府県等においても埋蔵文化財の保護活用が叫ばれ、大規模発掘が全国規模で開始された。この時に道路公団と住宅公団は、原因者負担制度を文化庁【昭和43年(1968)6月に委員会から庁へ昇格】と覚え書きを取りかわし、これが順次慣習化され、埋蔵文化財保護の立場から大いに救われてきたのであった。

この時代の波は10数年衰えることなく続き、都道府県単位が設置する埋蔵文化財センターの開設にもつながっていった(一部の県では教育委員会職員が直接現場を担当しているところもあった)。つまり、開発開発ムードが浸透し、埋蔵文化財発掘事業が急速に増していく時代であった。

## 2. 昭和39年の調査部員の採用

初代の平城宮跡発掘調査部長には、東博から榎本杜人さんが就任した。

そこで、全国の考古学専攻生のいる大学に募集の声が掛けられ、北は東北大から南は熊本大まで多くの受験生が集った。専門職として文部技官・技師(考古学・建築史・文献史学・美術史・写真技師)の採用が行われた。

入所者は、横山浩一・藤井功・佐原眞・荒木伸介・石井則孝・猪熊兼勝・伊東太作・松下正司・工楽善通・横田拓実・森郁夫・三輪嘉六・塚越正明・佐藤興治・高島忠平・栗原和彦・佃幹雄・鬼頭清明の面々であった。

上司には、森緇・守田公夫・坪井清足・田中稔・沢村仁・工藤圭章・田中琢などが在職していた。所長は美術史の小林剛さんであった。

平城宮跡の発掘は国家的事業であったので国内外からも注目され、50年から100年事業ともはやされていた。この事業を推進させるため、部長の下に各大学から考古学・歴史学・建築学の主任教授が招集され、調査指導委員会が組織され定期的会合を行っていた。このかたちは全国の都道府県にも採用され、吉野ヶ里遺跡の保存活用に関しては多くの助言をいただいていた。つまり公的機関による発掘調査には一定のルールとスタイルが確立されていた。

## 3. 39組の活動

平城調査部での一日は、朝8時から作業が始まり、夕方5時まで続けられた。発掘事務所時代に所員になった鬼軍曹的上司にしごかれ、ベルトコンベアーを動かしながら作業員を指揮し、柱穴・井戸・溝など買上げの終わった田んぼから順次発掘調査が進められていった。

当時はまだ食料事情もあまり良くなく、食事は、2人の賄婦を雇用して作ってもらった食事を全員でガブついてた。また2名による宿直当番もあり、夜食は毎晩ニッシンのインスタントラーメンか焼きソバであった。

仕事はきつかったが、団体行動的意識は高く、野球大会・運動会・結婚祝賀会などそれぞれ趣好をこらし大いに楽しんでた。村田という酒屋が近くにあり、長龍の二級酒が旨く、現在も飲みつがれている。

39年以降も採用は続き、研究所の最盛期には100名近くの所員を要したこともあった。

全国で発掘がさかんになると、各地から発掘指導の要請が調査部にもたらされ、私は藤井功さんと三重県四日市市の智積廃寺の発掘調査へ数カ月派遣され出掛けたこともあった。

昭和43年(1968)以降、太宰府跡・草戸千軒跡・多賀城跡・難波京跡等、国からの補助金による発掘調査が可能となり、これらの調査機関へ先輩格の岡田茂弘・河原純之・八賀晋・本村豪章さんなどと共に、39組の多くが各地へ派遣されるようになった。この頃から、39組の活動が良く知られるようになり「華の39組」と呼ばれるようになったのではなからうか。

一方、平城での発掘の厳しさからたくさんの替え歌・エレジーが誕生している。代表的なものを紹介すると「アサダ8ジダスコップサゲテ キョウオモホルホル ハイラノアナヲ ウエハムギワラ

略歴	
1936年	東京鷺宮に生まれる
1964年3月	早稲田大学大学院文学研究科芸術学専攻修士了 文化財保護委員会記念物課(現文化庁)へ入省
同年3月1日	奈良国立文化財研究所平城京跡発掘調査部へ異動
同年5月1日	千葉県教育委員会へ異動
1970年4月1日	東京都教育委員会へ異動
1980年4月1日	東京都埋蔵文化財センター所長で定年退職。公務員生活終了
1996年7月15日	この間、筑波大学・早稲田大学等9大学の非常勤講師を歴任。昭和女子大学は70歳定年まで22年間勤務
2001年4月1日	帝京大学文学部専任講師
2007年3月	定年退職

シタハゴムナガ ウチノオヤジハヘイジョウキンム 月月火水木金金「アナタダケガ ヘイジョウノヒトヨ テナコトイワレテ ソノキニナツテ ヘイジョウヘキタノガ オオマチガイ ヒトコトモンクヲイッタナラ キミヤメテモイインダヨ ハイソレマデヨウ」てな具合で良く働き学んだ平城調査部の仕事ぶりが良くわかるであろう。

調査部は発足して4～5年たった頃から、地方からの要請により、藤原京跡発掘調査部の発足もあったが、39組の異動が始った。太宰府の調査で藤井功・栗原和彦が福岡県へ、多賀城に岡田茂弘が宮城県へ、一乗谷の朝倉館の調査に河原純之が福井

県へ、草戸千軒遺跡の調査に松下正司が広島県へ、出向なり異動していった。百済廃寺や一乗谷の調査に私も参加したが、今、一乗谷に立つと応時では考えられない復原の姿をみる事が出来、感慨ひとしおである。その後も大学へ出る人もいて、停年まで在職したのは工業普通・町田章・佃幹雄ぐらいだろう。鬼籍に入った者7人おり、昔時を語れる人もだいぶ減ったが一人一人の業績を辿ることによって、昭和40～50年代の日本考古学の全体像が把握できるのでは、また埋蔵文化財行政全般にわたっての歴史的動きも記録できるであろう。奈文研・華の39組に栄光あれと願うものである。

隔月連載です。次回は渡辺誠先生です。

## レーエッセイ

### マイ・フェイバレット・サイト 94

## 徳島城跡・一宮城跡・勝瑞城館跡ほか ～ 徳島県徳島市・徳島県板野郡藍住町 — 近藤 玲

私のお気に入りの遺跡ということで、どの遺跡が良いか、つらつら考えてみた。小学生の頃から私はなぜか城が好きであった(今でも好きである)。プラモデルで、姫路城、岐阜城など名だたる城はほとんど作った。城好きが高じて、歴史に関心を持つようになり、大学では考古学を勉強するようになった。そのためか、今では徳島県内の発掘調査等を通じて、遺跡と関わることが多くなった次第である。

こう考えると、やはり自分の原点に立ち返り、今回の遺跡紹介では城跡を中心に、徳島県の歴史に触れてみようと思う。JR徳島駅から線路沿いを南東に400m、歩いて5、6分のところで、右手前方に徳島市役所が見え隠れする。この辺りで左手に線路を東へ横断できる歩行者用の古びた陸橋を渡ると、そこはもう徳島城内である。城内に立ち北側前方を見ると、かつて御殿が建ち並んだ場所には、現在では徳島市立徳島城博物館があり、西側には食堂がある。徳島城に来ると、この食堂でうどんやおでんをつい食べてしまう。さて、徳島城博物館が建つ北側には標高61mの城山があり、ここに本丸が置かれ、以前は天守もそびえ、徳島城中枢部が配置されていた。今は石垣だけが当時の佇まいを見せている。この城山の東麓端にはひっそりと貝塚がある。徳島が生んだ碩学、鳥居龍蔵氏が調査した城山貝塚である。大正11年(1922年)に行われた調査で、縄文時代後期の土器片や人骨、貝殻などが発見された。徳島県における考古学調査の草分けであり、学史上も重要な遺跡である。

なお、徳島城は明治37～38年(1904～1905年)の日露戦争の戦勝記念事業として公園化され、後年、徳島市による徳島城博物館建設等に伴い発掘調査が城内各所でな

れ、整備も進み平成18年(2006年)に国史跡となり現在に至っている。徳島公園から南西を見上げると、平安時代の歌人紀貫之が記した『土佐日記』にも書かれた眉山が眺められる。

徳島城は、蜂須賀家政によって、天正13年(1585年)から築城されたが、家政が豊臣秀吉の命を受け阿波入国に際し、当初領国経営の根拠地としたのは、標高144mに立地する山城の一宮城である。一宮城は、阿波の守護であった小笠原長房の孫にあたる長宗が南北朝時代の暦応元年(1338年)に築城したとされる。一宮城からは眉山の西側を北流し、徳島城のある城山方面へ向かって東流する鮎喰川がよく見える。前号エッセイの執筆者藤川氏の紹介にあった阿波国府跡と推定される観音寺遺跡なども遠望できる。徳島城下周辺は、近世以降現在に至るまで徳島県の中心地であるが、それ以前は、一宮城眼下の観音寺遺跡周辺が、それこそ弥生時代から徳島の拠点であった。観音寺遺跡の南に位置する矢野遺跡では、縄文時代後期初頭の竪穴住居跡がまとまって発掘調査され、西日本では有数の集落遺跡として名高い。弥生時代でも検出された竪穴住居跡は100棟以上で、徳島を代表する集落遺跡である。また、平成4年(1992年)に、ほぼ完形の突線鈕5式銅鐸が木製容器に埋納されたと推定される状態で出土したことは記憶に新しい。さらに古墳時代前期初頭の鍛冶工房跡からは、細頸壺の中に収められた砂鉄が約200グラム見ついている。『アルカ通信』No.96、桐原健氏の「私の古代学覚え書(第16回)」の記述によれば、長野県埴科郡戸倉町(現在の千曲市)所在の円光房遺跡でも縄文時代の小壺に砂鉄が充満して発見されており、日本列島の鉄の歴史を考える上で、容器入りの砂鉄は非常に興味深いとあらためて思った。

さて、蜂須賀氏の領国支配の前の阿波は誰によって統治されていたのかというと、室町時代に阿波守護であった細川家に仕える守護代の三好氏である。応仁の乱以降の下克上により、守護の家臣である三好氏が台頭し、とくに天文～永禄年間(1530～1560年代)に畿内まで勢力を伸ばした三好長慶が有名である。この三好氏の本拠地が藍住町勝瑞に所在する勝瑞城館跡である。平成11年(1999年)以降、藍住町教育委員会と徳島県教育委員会による本格的な発掘調査で、上幅約13mの濠や、基底部幅約12.5m、高さ約2.5mの土塁が確認され、大規模な濠で囲まれた区画や、区画の内部からは枯山水庭園や館の主殿と推定される建物跡なども検出さ



平成21年度勝瑞城館跡発掘調査現地説明会(筆者撮影)

れている。地道な発掘調査の結果、平成13年(2001年)に国史跡に指定され、現在も藍住町教育委員会が中心となり整備を継続している。

以上、徳島のお気に入りの遺跡を二、三紹介したが、これ以外にも魅力的な遺跡がまだまだある。四国にお立ち寄りの

際には、ぜひ、徳島県立埋蔵文化財総合センター(板野郡板野町所在)にお越しいただき、遺跡めぐりの助けとしていただければと願う。

※次回のマイ・フェイバリット・サイトは中村 豊さんです。

## 考古学者の書棚

### 「世界歴史1 先史の世界」

有光教一・樋口隆康編集／人文書院(1965)

藤田 富士夫

書齋にガラス戸入りの書棚がある。そこには、心に残る図書が収まっている。山内清男博士の“思い出”の図書数冊がそこにある。私が、成城大学の山内先生をお訪ねしたのは昭和42年の秋であった。

その年、私は古代窯業を研究する坂詰秀一先生に学ぼうと立正大学へ入学した。しかし、その年から教養学部は埼玉県熊谷市の新校舎での授業となった。先生に直接話しかける機会のないまま空虚な日々を重ねていた。このままでは考古学への意欲が薄れてしまう。

偶々、学生寮で同部屋にいた北海道遠軽町出身の中村数男君が早稲田(大学それともお住まい? 当時、彼はそう言っていた)の金田一京助先生にアイヌ語を教わりに行くと言って東京通いを始めた。それではと、私も五反田にある大学の坂詰研究室の前まで行った。ところが前室に先輩たちがたむろしていた。田舎者の私は気おくれしてそのまま熊谷へと引き帰した。まもなく大学紛争が始まり、立正も混乱の渦中となった。

考えあぐねた末、富山県の縄文土器編年でその名を知っていた成城大学の山内先生の研究室を訪ねることとした。成城は静かであった。そのころ東京の高校生である山村貴輝氏も先生を訪問されていた。山村氏は先生に「初対面者どうしは名刺を交換するものだよ」と促され、「そこらへんのザラ紙に名前や所属を書いて藤田氏と交換した」とエピソードを書いておられる(山村貴輝「山内型式学についての覚書」『画龍点睛』1996年)。出入りを許された私は授業の合間を見て熊谷(後に東京・代々木八幡)から成城へと足を運んだ。

研究室では、岡山県・福田貝塚の土器の分類や写真撮影などをした。ある時、講義の聴講を申し出た。すると「一番前の席で聞くように」と。大学正面右奥の233号教室で40名程が受講していた。昭和43年度は水曜日の4限目(14時~15時30分)に一般教養を担当されていた。聴講ノートは全部で8頁ある。内容からみて3~4コマ程を受講したようである。中ほどの頁に10月30日(水)とメモしている。ようやくここに記すが、本書は山内先生がその時使用されていた教科書なのである。

先生の講義は、板書の多いものであった。英語(ただし考古学用語だけ)を交えて行われた。ある日の講義メモ(昭和43年11月)を記す:「石器製作の傳統 Traditionsによって分類すると、核石器 Core toolと剥片石器 Flake toolとがある。これらは別々に発達し、ある所では混じったりして、色々な文化、今まで言われているアシュレラン文化、ルバレアン文化などを作っている。…(略)…世界の2つの文化圏の対立は、日本の旧石器を考えるうえで重要な意味をもつ。日本でも打割石器が発見されるようになってきた。それが欧州のどこの年代にあたるかは不明である。無土器文化が日本

各地にある。その石器の多くが欧州の後期旧石器に似ている。[ここで欧州の洪積世地層を年代順に板書し、「100万年前に洪積世が始まる。5万年前に洞窟芸術や人形が出現する(教科書60頁)それ以降の旧石器文化にchopping toolがある」と解説]…(略)…、日本の学者の多くはchopping toolの文化圏を知らぬ。欧州と比較して日本の考古学者は無土器文化を旧石器にさかのぼらせている。しかし無土器文化にはblade文化がない。無土器文化と旧石器とは違う。磨製石器が無土器文化に伴う(教科書85頁)。磨製石器は旧石器にはない。日本での無土器文化は新石器時代の範疇に含まれる」といった具合である。一般教養では少々難しい内容かもしれないが、成城の学生は私語一つなく真剣に聞いていた。

教科書18頁に「先史文化の地域的落差」の表がある。旧石器文化が100万年前にアフリカに発し、50万年前に東アジアに達し、1万年前後にアメリカ大陸へ到達する。中石器時代を挟んで西アジアに農耕文化を伴った新石器時代がB.C.8000後に誕生し、東アジアではB.C.2000頃に現れるといったものである。講義では、この表の解説に多くの時間を費やしておられた。

これは、先生のいわゆる「短期編年論」と称される年代観の根幹にある視座である。言うまでもないが、晩年の論文(「縄紋草創期の諸問題」『MUSEUM』第224号 東京国立博物館編集1969年11月)に方法と年代観が凝縮されている。そこでは14C年代への痛烈な批判がなされ、考古学本来の年代決定によれば縄紋開始の推定年代はB.C.2500だとしている。それは、世界全体の技術区分と経済段階を基軸に置いてのものであった。

本書の記述は、山内論に沿ってなされている。新潟県小瀬ヶ沢洞穴の植刃や青森県長者久保遺跡の局部磨製のヒ刃円鑿をシベリアのイサコヴォ文化に伴うとする(85~86頁)。巻末の「2表. 北ユーラシアの原史文化年表」における縄文文化の編年は「山内清男博士による」と注記されている。本書編集・執筆の有光教一京都大学教授や樋口隆康助教授と親交があった。先生は本書が記す人類史や先史文化について大きな信頼を寄せておられた。

書棚の本書はかかる山内先生の“思いで”と共に在る。

## アルカ通信 No.101

発行日 2012年2月1日  
 発行人 角張淳一  
 発行所 考古学研究所(株)アルカ  
 〒384-0801 長野県小諸市甲49-15  
 TEL 0267-25-0299  
 aruka@aruka.co.jp URL: http://www.aruka.co.jp